

書評

嶺井明子・川野辺敏 編著

『中央アジアの教育とグローバリズム』

桐 谷 正 信*

本書は、科学研究費補助金・基盤研究(B)・海外学術調査『ポストソ連時代における中央アジア諸国の教育戦略に関する総合的比較研究』（課題番号20402059 平成20～22年度，研究代表：嶺井明子）による3年間の調査・研究の成果をまとめたものである。

本書の目的は、1991年のソビエト社会主義共和国連邦（以下、ソ連）解体を契機として中央アジアに誕生したウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタンの四カ国の、独立以降の教育の理念・制度の変化・現状・課題を総合的に解明することである。その分析観点は、社会主義時代との連続面・非連続面、変容に影響を与えた国内要因・国外要因など多彩である。それらの多様な観点から、中央アジアの教育の実相を社会主義時代との対比という縦軸と、教育のグローバリズムといった横軸から描き出すことがねらわれている。中央アジア諸国は、独立国家共同体（CIS）を構成し、独立後もロシアとの関係を継続していると同時に、世界銀行などからの援助・協力も提供されている。「政治的、経済的、文化的にトランスナショナルな関係が交錯する」状況にある。また、カザフスタンとタジキスタンでは、国民総所得に約10倍以上の差が生じており、「中央アジア」と一括りに語ることができないため、各国別にその教育の状況が語られることが必要である。執筆陣も、日本人研究者のみならず、カザフスタン、ウズベキスタン、キルギスの研究者も参加しており、中央アジアの教育に関する総合調査研究にふさわしい陣容となっている。

本書では、このように複雑で多様な関係が交錯する「中央アジア」の教育を描き出すために以下のように構成されている。

序 独立前の中央アジア

第Ⅰ部 中央アジア各国の教育改革の軌跡

※埼玉大学教育学部

- 第1章 ウズベキスタン共和国―「漸進的」改革モデル―
- 第2章 カザフスタン共和国―躍進する中央アジアの雄―
- 第3章 キルギス共和国―模索が続く国づくりと人づくり―
- 第4章 タジキスタン共和国―内戦をのりこえて―

第II部 教育をめぐる諸問題

- 第1章 農村の子どもの教育保障―帰還カザフ人・障がい児を中心に：カザフスタン―
- 第2章 教育にみられる民族的特性―ウズベキスタン―
- 第3章 数学の授業過程からみた学びの特徴―カザフスタンの授業分析を通して―
- 第4章 「憲法教育」と国民統合の課題―ウズベキスタン―
- 第5章 「ロシア語化」「カザフ語化」政策 対 多言語主義―カザフスタン―
- 第6章 少数民族の母語教育保障のパラドックス―カザフスタン―
- 第7章 リテラシーと多言語併用をめぐる中央アジアのクロスロード―ヴィゴツキー L. S. とリルヤ A. R. の「文化的＝歴史的理論」―
- 第8章 グローバル化時代の高等教育の発展―キルギス―
- 第9章 高等教育における公正性確保と質保証―不正行為対策に焦点を絞って：キルギス―
- 第10章 高校生の9割が学ぶ職業カレッジ―ウズベキスタン―

第III部 教育戦略とグローバル・ガバナンス

- 第1章 世界の「多極化」と中央アジアの教育協力
- 第2章 教育戦略とグローバリズム

このように、本書は序と三つの部（計16章）と適宜挿入されているコラムによって構成されている。本書の枠組みの一つが、ソ連解体後の中央アジア各国の変化であるため、序は、独立国家誕生以前の中央アジアについて概観している。第I～III部では独立後の中央アジアが対象とされている。

第I部では、ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタンの四カ国別に、現地調査を踏まえて、独立以降の教育改革の軌跡と改革の現状、課題が整理されている。中央アジア諸国は、ソ連解体に伴って、いわば「受け身的に独立させられた」国々である。その国々が、独立後20年でどのように改革のビジョ

ンや新国家建設・国民統合のシンボルを創出してきたかを分析している。ウズベキスタン、カザフスタン、タジキスタンは、経緯や重点は異なるものの、伝統的な価値や歴史に新国家の国民統合のシンボルを見出そうとしたしてきたことは興味深い。ウズベキスタンは、英雄・偉人を「発見」し、それらによる「国史」を編纂した。マラッハの復活など伝統と文化の再興を、新国家における教育の中核に位置づけた。カザフstanは、人口の約60%弱しかカザフ人はいないが、ロシア語と同等の言語としてカザフ語を位置づけ、カザフ語重視の教育政策をとっている。タジキスタンは、内戦を経たため、他の中央アジア諸国に比して改革の歩みは早くはないが、タジク語必修化やペルシャ語などの祖先の言語の学習を通して、やはり、歴史的伝統を中核にした教育の再編を試みている。キルギスは、伝統を重視する志向はありながらも、他の三国とは異なり、キルギス語とロシア語の両者を重視している。経済的理由から、将来ロシアやカザフスタンで働くことを考えると、ロシア語の習得が欠かせないからである。

中央アジアが、ソ連解体による社会主義思想後に、伝統・文化・歴史という民族主義的な価値を新国家における教育的シンボルとして重視したことは注目すべきである。ソ連解体によって中央アジアは、新たなヨーロッパ型の民主主義国家が誕生したわけでもなく、単なる小さなソ連型国家に分裂したわけでもない。ソ連以前の歴史と伝統に回帰しながらも、ロシアとの関係を維持する新たな国家群が誕生している経緯が描かれている。

第Ⅱ部は、10の章から成る本書の中核部分である。「教育環境」「学習内容・方法」「言語問題」「大学・職業教育」の四つの問題群から、各国の教育問題に迫っている。

「教育環境」では、カザフスタンとウズベキスタンにおける事例が取り上げられている。カザフstanの事例では、農村における社会的に弱い立場にある子どもたち（帰還カザフ人と障がい児）の教育を受ける権利の保証について取り上げられている。ウズベキスタンの事例では、多文化主義を理念として掲げながらも、マラッハにおける伝統的な価値との相克にある現状が取り上げられている。

「学習内容・方法」では、カザフstanの数学授業の特徴と、ウズベキスタンの「憲法教育」の取り組みが取り上げられている。カザフstanの数学の授業に関する分析では、TIMSSの研究を参考に、日本、ドイツ、アメリカ、カザフstanの数学授業の特徴を分析している。その上で、国際的な学力比較の枠組みでのカ

ザフスタンの数学教育の今後の動向にまで言及している点は興味深い。ウズベキスタンの事例では、幼稚園から大学まで長期に渡り学習することが求められる「憲法教育」が取り上げられている。

「言語問題」では、カザフスタンの「カザフ語化」政策と少数民族の母語教育保障、ヴィゴツキーとルリヤの「文化的＝歴史的理論」に基づくリテラシーに関する研究が取り上げられている。カザフスタンの「カザフ語化」政策に関する研究では、現在の「カザフ語化」政策は、単一言語主義のイデオロギーを有しており、ソ連時代の「ロシア語化」政策と本質的には近似であることを指摘している。そのためのさまざまな利害の衝突が生じていることも、ソ連時代と同様であると指摘している。多民族国家における言語のヒエラルキーに関わる優れた論稿となっている。少数民族の母語教育保障の事例では、前章の「カザフ語化」政策下での少数民族の母語教育保障におけるパラドックスを鋭くえぐりだしている。少数民族は母語で教育を受ける権利を保証されているが、それは少数民族の中でもマジョリティである三つの言語に限られている上に、母語以外の言語能力の育成が重視されておらず、ドミナントな言語（カザフ語とロシア語）の習得の保障が狭められていることが指摘されている。

「大学・職業教育」では、キルギスの高等教育についての二つの論稿と、ウズベキスタンの職業カレッジについての論稿がおさめられている。キルギスの高等教育についての一つ目の章（第8章）では、高等教育機関の国際化や教育の質保障システムの改善など、キルギスの高等教育の現状についての概要がまとめられている。キルギスの高等教育に関する二つ目の章（第9章）では、公正性の確保と質の保証について、不正行為対策に絞って考察している。高等教育への国家予算の大幅削減によって、大学や大学教員が自己資金の獲得のための不正行為を行っており、今後も改善が難しいことが指摘されている。「共和国共通テスト」による入試改善における成功は、光明であろう。ウズベキスタンの職業カレッジについては、ウズベキスタンの若年層が多い人口構成や産業の特徴から、人材養成に力を入れ、9割の若者が中等専門職業教育を行う職業リセにおいて職業教育を受けていることを報告している。ウズベキスタンの経済状況の変化と職業教育の関係や、進路選択のための制度など、職業教育の実態が詳らかにされている。

第Ⅲ部は、教育戦略のグローバリズムを主題として、二つの章が設けられている。世界銀行などの国際援助コミュニティの教育改造戦略と、中央アジアの教育

協力ネットワークが取り上げられている。二つの章によって、中央アジアが、ヨーロッパや上海協力機構などの東アジア、CIS、ロシア、トルコ、世界銀行、OECDなどのさまざまなコミュニティから援助を受けると同時に、それらのコミュニティから制約を受けながら、グローバル・ネットワークで変貌している中央アジアのダイナミズムを描き出そうとしている。その中で、民族と歴史の重みへと回帰している動向は気になる点である。

本書が明らかにした中央アジアの教育の姿は、「社会主義ソ連時代に構築された教育制度の基盤の上に、グローバル化による国外（ユネスコ、OECD、国際援助機関、ロシア、中国など）からの影響・協力と援助と、国内事情（多民族国家、イスラム的伝統、都市と農村の格差、経済の人材需要など）の葛藤の中で教育政策が選択され推進され」ている姿である。

本書には、我々のイメージマップでは、えてして存在が小さくなりがちな中央アジアの国々の、この20年の歴史と現状と今後が示されている。先の見通せない不確実性が増すグローバル社会における教育のあり方を検討する書として、一読をお薦めしたい。

嶺井明子・川野辺敏編著『中央アジアの教育とグローバリズム』

東信堂、2012年、3200円（税別）